北アルプス　爺ヶ岳主稜～赤沢岳北西尾根～黒部川～内蔵助平～真砂尾根～室堂

日時:1992 年 4 月 26 日～5 月 2 日

メンバ:L 鵜飼一博　他 1 名（立命館大・吉本）

概要:3月の白馬岳主稜を終え、GW山行の計画を立てるのにあたり、どうしても学生だけで黒部川を越えたいとの思いから、再び関西学生山岳連盟に所属する山岳部にアタック。クラブではなかなか計画できない黒部越のため、各山岳部の精鋭から問い合わせがあり、立命館大学の吉本とパートナーを組むこととした。黒部を越えるにあたっては、まず大町側であるが、バリエーションを登りたいとの思いと、あまり報告がないところということで爺ヶ岳主稜を選んだ。また、黒部川への下降は、降りやすさと剱への継続の仕方を考え、赤沢岳北西尾根とし、剱は積雪期も登っている源次郎尾根としたが．．．。

記録

4 月 26 日　晴

大谷原（5:50/6:00）－主稜末端（10:00/10:15）－取り付け（10:45/12:15）－キャンプ 1(15:15)

前日、相変わらずの急行ちくまで離洛。

大谷原から小冷沢を沢沿いにつめるが、ときおり行く手を阻まれ高巻を余儀なくされ、10m程度の懸垂下降の箇所もあり、アプローチから楽しめた。

主稜は、爺ヶ岳主峰にダイレクトに突き上げる尾根であり、小冷沢の最上部に位置するため、いつまでも冷尾根と東尾根に囲まれ圧迫感を感じた。

この山域における上級者向けといわれる北稜の取り付きからさらに上部に歩を進め、ようやくに二ノ沢と三ノ沢の合流地点にて主稜の末端部につく。主稜は、この末端部から取り付くルートもあるようであるが、岩壁帯を含むため、今回は三ノ沢側のルンゼから尾根に上がるルートをとることとした。

三ノ沢にてルンゼを偵察し、落石などの心配がないと判断し、昼過ぎから登攀開始。アンザイレンすることなく約 30 分でルンゼを登りきる。雪がべったりついているからこその登高スピードだった。その後は、割とゆるくて広さを持った雪稜となり、残雪期ならではの楽しい登高となった。南の東尾根、北の北稜とも、よい眺めであるが、さすがに北稜は主稜より厄介な雪稜と思われた。

15時を過ぎたあたりで適当に整地し幕営。2人の場合、テントが小さくて済むため、テントを張るのに困らないのが良い。

4 月 27 日　晴

キャンプ 1（6:00）－主峰（11:00）－種池（11:45/12:15）－新越乗越キャンプ 2（16:30）

昨日と違い、雪稜に亀裂が入っている箇所が多く、慎重な登高を強いられ、何度かザイルをだすこととなった。急雪壁は亀裂を避けながらダブルアックスで乗越し、キノコ状の稜線は二ノ沢側から巻いた。最後は雪庇の発達がもっとも小さいところを攻め、主峰の北側 20mのところに出た。ようやく、剱岳を見ることができ、これからの道のりの長さを改めて感じるとともに、やる気がみなぎってくる。

主峰からは広い雪稜を赤沢岳まで、とにかく行けるところまで急ぐが、重い雪に足取りは軽くならずに新越乗越で幕営となった。

4 月 28 日　晴→曇

キャンプ 2（5:10）－赤沢岳(7:30/7:50)－黒部川キャンプ 3（16:50）

朝日に照らされる赤沢岳を目指し、いつもより少し早めに出発。赤沢岳北西尾根を偵察しながら、別ルートから登っていた立命館大学パーティと赤沢岳山頂にて合流。

赤沢岳北西尾根は、4人で下降することとなる。急雪壁が多く、後ろ向きでのクライムダウンが続くこととなり、足への負担が大きかった。また、滑落したら黒部川まで止まりそうにない斜面でのクライムダウンは肉体的だけでなく精神的にも緊張感が続いた。

樹林帯まで下がってくると、何度か二重山稜の

ような分岐があり、ルートファイディング能力を問われたが、時折見つかる赤布に助けられ、無事北西尾根を下降することができた。

末端部では崖状になっており、小さなルンゼへはササにつかまりながらのクライムダウンを強いられたが、無事、黒部川に降り立つことができた。

少し丘になったところで、幕営。夜間、伊藤先生パーティと交信するが、天気は下り坂だということで、明日からの行動をどのようにするか悩みつつ就寝。

4 月 29 日　霙（夜）　晴

キャンプ 3(7:00)－内蔵助谷出(7:30/8:00)－内蔵助平(10:30/11:30)－ハシゴ谷乗越(12:40/13:10)－2291mキャンプ 4(16:40)

朝、伊藤先生と交信し、内蔵助谷出会いに、高層天気図と差し入れをデポしてくれているとの事。立命館の別働隊と別れ、内蔵助谷出会いまで歩く。高層天気図を手に入れ、天気が下り坂に向かっていること、過去3年間雷鳥平での合宿において、最長で3日間吹雪いた経験から真砂尾根から室堂に降りる計画に変更することとした。

丸山東壁の下をとおり、広い内蔵助平にて大休止。ハシゴ谷乗越、真砂尾根とも特に技術的な問題はなく、のんびりとした登高が続いた。

黒部川側に発達している雪庇を踏み抜かないように、剱側のダケカンバ林を進んでいた。しかし、少し雪庇に近いところを歩いてみたところ、急に体が落ち、胸の辺りまで雪庇の亀裂と思われる隙間にはまってしまった。もがけばそのまま雪庇と一緒に崩壊すると思い、足場だけ確保し、あとはパートナーの吉本にシュリンゲをダケカンバに固定し手ももらい、脱出。

その後は、それまでどおり剱側の安全地帯を歩き、適当なポイントで幕営。

4 月 30 日　雪

キャンプ 4(7:10)－2310mキャンプ 5(13:00)

予想通り天気は悪くなったが、歩けないほどではないため、とりあえず前進。

思ったよりも風も強く、ホワイトアウト状態になり、自分の場所がわかりにくい状態になってきたが、前進した。ホワイトアウトの状態は時間を追うごとに、悪くなり、尾根のどの辺を歩いているかわからなくなってきた。特に昨日雪庇の亀裂にはまった経験から黒部川側を歩くことができなかった。

途中、岩陰などで休憩しながら進むが、急雪壁をトラバースしている時、足元がズーンとうなり表層雪崩の前兆ではないかと判断し、登高をあきらめ、安全地帯までいったん下ることにした。3時間程度、ツエルトで時間をつぶすが、一向に回復しないため、樹林帯まで下がって幕営することとした。夜間に一度テントラッセルを行い、就寝。

5 月 1 日　曇

キャンプ 5(10:30)－内蔵助山荘（14：15/14：30）－別山(15:40)－雷鳥平キャンプ 6（17：30）

昨日と同様視界は悪いが、降雪がないため、少し偵察した後、出発。昨日引き換えした場所も、慎重に加重をかけないように、ゆっくり歩を進め、何とか内蔵助山荘に着く。

真砂西尾根でなく、別山経由で雷鳥平に下りることにするが、別山から別山乗越を経由するはずが、大きくルートをはずれ、そのままトラバース気味で雷鳥平につくこととなった。昨年11月に、このあたりでホワイトアウトになっても間違わないように、コンパスのみでの歩く訓練をしたのだが、ホワイトアウト時のルート選定の難しさを確認することとなった。　17時 30 分、雷鳥平に到着し、ようやく緊張感から開放された。

5 月2日　曇

キャンプ6(9：20)－室堂（10：00）

雷鳥平でワンダーフォーゲル部の入山を出迎えた後、室堂に下山。

最後に

未だに剱岳にチャレンジしなかったことは後悔している。3月の白馬岳主稜では予備日を全て使い、在京のOBをハラハラさせたこと、各大学山岳部による混成パーティであることなど、予備日を残して下山連絡をしたかったのが、真砂尾根から室堂に下山することにして理由ではあるが．．．。

それでも、今回の雪稜は全て初見であったこと、

剱岳を超えていないため黒部川越と言ってよいかわからないが、長野県から富山県に越えたことには満足している。

（記／鵜飼）